

いろいろな人とのかかわりの中で育つもの

～N児の育ちを追いながら援助のあり方を探る～

講師 森 本 かほる

はじめに

9月から、4歳児のある学級の保育補佐として、いろいろな面で課題を持っているN児とかかわることが多くなった。N児とかかわり始めた頃は、N児が4才児になり、新しい学級に進級したこと、2学期が始まったばかりであったこともあり、気持ちの面で安定感がもてていなかったためか、人とかかわりをもつより、自分の好きな「物」で遊んだり、N児特有の世界の中で遊ぶことで安定感を得ていたように感じた。この時期、N児が人とかかわろうとする姿は、私にはほとんど見るができなかった。このような姿から、私は、N児が人とのかかわりを自分から求めるようになり、N児なりに、いろいろな人とのかかわりの中で響きあって生活していけるようになってほしいと思うようになった。そして、N児とかかわっていくうちに、このような特性を持った子どもたちに、どのように援助をしていけば（その子どもたちなりに）響きあって生活していけるのだろうか？と考えるようになった。

N児にとって「響きあう」とはどのようなことなのか？N児のような特性を持った子どもたちが響きあって生活していくには、幼稚園という環境で、どのような援助をしていけば良いのか？という課題を、今までの実践の記録を振り返りながら、N児の事例を中心に考察していこうと思う。

I 対象児N児について

○対人関係、コミュニケーション、情緒の発達などが同年齢児と比べるとゆるやかであるように感じられる。

○3歳児の頃のN児の姿

（平成13年3月6日、3歳児担任著「N児の最近の姿から」という資料から引用させてもらう）

「特定の仲良しいないが、A児やB児とはふとした遊びの場面で互いに顔を見合わせたり、体を触れ合って追いかけてっこをしたりする姿が見られた。耳に入った友達の名前をつぶやくように言うことはあったが、相手に対して直接名前を呼んだり話しかけたりする姿は見られなかった。友達のしていることに興味を持って近付いて見たり、一時同じことをしてみる姿も見られた。（略）…。」

○4歳児の一学期のN児の姿

(以下の文は、N児の担任の先生から聞いた「N児の姿」を参考にさせてもらったが、実際私が、短い時間ではあるが、N児の姿を見たり、接したことで感じたことも文に加えた。したがって、ほとんどが私独自の捉えである。)

「4歳児の一学期は新しい環境に対する不安感からか、物(棒回しなど)へのかかわりが特に多かったように感じた。3歳児の終了期のような人とかかわりは見られなかったようである。言葉はあまり聞かれないが一語文をいくつか話したり、こちらがいった言葉を繰り返す言うことがたまにあったと捉えている。」

Ⅱ 響きあう姿を求めて

1、響きあうということとは？

まずはじめに、響きあうとはどのような状態のことをいうのかを考えてみたところ、お互いの存在をしっかりと認め合って、素直に友達と向き合って生活している状態のことではないかと私は思った。友達の個性を知って、受けとめ、存在を認めることではないか。認め合っていない状態で、一方が強くて、片方が引いてしまうと響きあうことができないと思う。例えば、太鼓のバチで太鼓を思いっきり叩くが、皮がゆるんでいたので太鼓本来の一番良い音が響かない(向き合う)、または、鳴らす側が楽器の個性をしらず音を鳴らすことで、本来持っている良い音や未知の新しい音が響かない(認める、知る)、ということと似たようなものがあると思う。

2、N児にとって響きあうとはどのようなことだろうか？

<N児にとって響きあって生活するということはN児のどのような姿を求めていくことだろうか。そして、どのように援助をしていくことだろうか？>

N児にとって響きあうとは、人とかかわることの楽しさを感じることで人に関心を持ち、人とかかわりを持つとしたり、友達と楽しさを共感したり、友達の声かけに答えようとするなど、N児なりに人と向き合おうとしている状態のことをいうのではないか。したがって、自らの意志で友達とかかわって遊ぼうとしたり、友達からの誘いを受けたとき、応じて、一緒に遊ぼうとするN児の姿を求め、それに適した援助をしていかないといけないと思った。

それには、まずN児が人に関心を持ち、かかわりたいと思わないといけない。そして友達の誘いや、遊びの中での(N児への)声かけに、N児が気持ちを向けて、応えていくことが必要となる。N児が幼稚園生活を楽しみながら、友達への関心やかかわる力が育まれていくよう、保育者として適切な援助をしていく必要があると思った。

また、友達がN児の存在をしっかりと認めていくことが必要であると思った。そういう状態の中で、N児は、友達への関心やかかわる力がよりよく育まれていくのではないか。

3、人（友達）への関心やかかわる力を育むにはどのような援助が必要か？

＜N児の人とのかかわりについての育ちを追いながら、考察していく。＞

記録と考察（N児＝対象児、MT＝森本）

①人に対して関心をほとんど示さないN児（9月上旬～9月下旬）

9/10 登園し保育室でシールなどを貼った後、他の組、保健室、他の組といったように、短いインターバルで場を転々と変えていく。人に対しては、大人を見つけると飛びこんでいったりするが、大人側からのかかわりにはほとんど応じてくれない。「Nちゃん」という呼びかけにも振り向いてくれない。また、声かけをしても聞こえていないような態度をし、自分のしたいことをしたり、行きたいところへ行く。大人に対しては誰に対しても同じくらい親しみを持ってはいるが、N児が人（大人）と、かかわりたい時しかコミュニケーションはとろうとしない。図鑑や棒遊びなど、物とのかかわりが多い。

9/12 N児とMTが廊下で走りっこをしている。C児も追いかけてきて3人で一緒に走る。C児「1着!」、N児「1着!」、C児「(N児は) 2着、先生は3着!」といったやりとりの後、N児がC児を何回か指さし、MTの方を見る。MT「Cちゃん!」、N児（C児を見ながら）「Cちゃん」と言う。しかしC児にはN児の声の抑揚から特別な感情は持っていなかったのではないかと感じられた。

考察① N児が人に関心を持つためにはどのような援助が必要であったか

N児の転々とする姿や棒遊びなどから、二学期当初、N児は不安感を持っていたと考えられる。不安感から、人とかかわりを避け安定することができる「物」への遊びに向かっていったと思われる。したがって、N児にしっかり寄り添い、しっかり、ありのままのN児を受けとめながら、N児が安定する遊びを一緒に楽しみ、人とかかわりによって安定感をもたせることが必要であったと感じる。そうすることを繰り返していくことで、不安定になったとき人を求めていくのではないかと思った。

また、早く信頼関係を深めるためにもN児の好きな遊びを一緒にし一緒に楽しんだり、N児が笑っている時は一緒に笑い、こちら側からN児の気持ちに共感したり、スキンシップを多くすることが必要であった。

② MTの存在を認め、応じ始める。そして友達にも関心を持ちはじめたN児

(9月下旬～10月中旬)

9/28 「Nちゃん」という呼びかけに、たまに振り向くようになった。

10/2 登園して保育室に入ってきたとき、周りを見渡し、友達の方をしっかりと見て「おはよー！」と言う。友達に対して、最近では、指さしをして名前を知りたいというような素振りを見せる。9/12のそれとは違ったものが感じられた。MTが「～ちゃん」と言うまで友達を指さしている。そして、N児も「～ちゃん」と言ったりする。また、N児が興味を持つような、N児の視覚に訴えるような動きをしている友達の動きを真似したり、一緒に走りっこをするなど、コミュニケーションをするわけではないが、一緒に何かをする姿がみられるようになった。

10/4 部屋から出て行こうとするN児にMTが「ちょっと待って」と声をかける。N児は立ち止まって、こっちを見ている。少しずつ保健室の方へと向かうが、初めてMTの「待って」という声かけに応じる。

考察② 人に関心を持ち、応じ始めたN児にはどのような援助が必要であったか

N児と楽しい遊びをしたり、語りかけたり、長い時間一緒にいることで、N児がMTの存在に気づき始めたと思われる。この時期は、こちら側がしっかり向き合い、しっかりかかわっていくことで人の存在をしっかりと感じさせることが必要であったと思う。ある程度MTとかかわったことで、人に関心を持つようになり、友達にもたまに目がいくようになったと思われる。

この時期に、次の期に向けて、新たにN児とのかかわり方を考えなければいけなかった時期であったと思った。

③ A児に特別な親しみを持ち始めたN児 (10月中旬～)

10/15 N児、A児、MTで図鑑を見ている。A児「セミのぬけがら」、N児「セミのぬけがら」といったり、二人で背中をどんとどんとしたり、押し合ったりして楽しんでいる。

10/30 A児が「今日はNちゃんと遊ぶことにする。」とMTに言ってくる。N児はいつもと同じように自分の行きたいところに行きやりたいことをする。A児とMTは、N児を追いかけ

ていってはかかわっている。A児は途中で一緒に遊ぶのをあきらめたが、少し時間がたってから、グローブジャングルでまた一緒に遊ぶことになる。年長児のD子、E子も来る。一緒に楽しめるようにMTが回したり声かけをした。N児とA児は楽しそうだった。

10/31 登園してすぐ、A児とにらめっこをして楽しむ。A児の顔を見て笑う。MT「おもしろいねー」、N児「おもしろい顔〜」

11/14 お弁当の後、N児が「(遊戯室に) 行こう!」と言う。一緒にいたA児も「行こう!」と言う。そして遊戯室に行き、積み木の上で、N児、A児、加わったF児と一緒にいる。そこでN児が「Aちゃん!…ジャンプ」ジャンプ台の方を見る。N児「Aちゃん!…しようよ!」とA児の手を引っ張る。しかしA児は行こうとしない。初めて自分の言葉で自分の思いで友達を誘った。

11/22 A児が登園してくる。N児は今まで見せたことのないような笑顔でA児を迎えに行く。N児「Aちゃん!」と言い、N児から抱きつき二人で抱き合う。しかしその後は、二人で遊ぶわけではなくN児は自分のしたい遊びをしだす。

11/29 お弁当後、MTの手を引き、遊戯室へ行こうとする。そこでN児「Aちゃんは?」とMTに聞く。A児を見つけ、追いかけていく。MTとはほとんど1対1のかかわりであったが、N児、A児、MTとで、誰もが楽しさを感じられるような遊びである、追いかっこなどをして楽しさを共感できるように援助した。

考察③ 友達に特別な親しみをもち、友達を求めだしたN児が、友達と向き合っていけるようになるためにはどのような援助が必要であったか

N児の好きな遊びにA児がつきあってくれたため、短時間A児と楽しくかかわりをもつことができた。まだN児に友達とかかわりたいという気持ちが芽生え始めていたところだったので、A児がN児を追いかけていくことしかできず、一緒に触れ合ったりかかわりあったりすることはできなかった。このようなA児の積極的なかかわりあいによって、N児は友達の存在に気づき、友達とかかわることの楽しさを感じ、友達とかかわりたいという気持ちを引き出されていったと思われる。保育者の援助としては、A児もN児も自然に楽しさを感じられるように、無理に楽しさを共感させるような援助をしていくのではなく、自然な形で共感させることができるように、かかわりを一緒に楽しんでいくことが必要であったと思う。そうすることで、N児もMTより、友達の方に目がいったのではないかと思った。

④ (MTが) N児とかかわらなかったときのN児の姿～自分で見つけた遊びの時間帯～

(2月中旬～)

友達と短い間だが、すごろくなどをして遊んでいる姿が見られる。また、親しみを持っている友達のいる場へ行き、友達の真似をしたり、自分の好きなことをしたりする。まだ同年齢の子どもたちとイメージを共有して遊ぶことはできないので、一緒にいることを楽しんでいるようである。

考察④ 成長が感じられるN児に対して、今後の援助のしかたはどのようにすればよいだろうか

以前に比べて成長したと思われるものは、自分から友達とかかわろうとする気持ちが強くなり、確かになったことと、友達と一緒に簡単な遊びができるようになったことである。しかしまだ、自分主体で遊んでいることが多く、友達からの遊びの誘いには応えないことの方が多いし、友達の声かけに応えることも難しい。

N児は自分一人での遊びの楽しみ方を知っているため、一人でもどんどん興味のある物を見つけてはそれらと1対1で、かかわって遊ぶことができる。転々と場を変えていき短いインターバルの中で興味を持った物で楽しく遊んでいるときもあれば、自転車遊びのように、長時間その遊びを楽しむこともある。また、棒回しやひも遊びなどN児特有の世界で遊びを楽しんでいる時もある。しかし、今の期のN児においては、不安を感じ、それが行動に表れているときは、個別的なしっかりとしたかかわりが必要であると思う。不安がなくなることで、友達とかかわろうという気持ちが生まれてくると思う。

友達の存在に気づき始め、以前より友達とかかわりたいという気持ちを持ち、友達といると楽しいなという思いが芽生えたN児には、もっともっと友達と一緒に遊ぶことの楽しさを感じ、他の子どもたちも、N児も一緒に楽しさを共感するという経験が必要であると思った。

したがって、(保育補佐としての) 援助を以下のようにしていけばよいのではないかと考えた。

*援助のしかた

① 不安感のためN児特有の世界に入っていると感じたとき

不安を取り除くため、スキンシップやN児の好きな遊びを一緒にする。そうすることで、次の遊びへ向かっていけると思われる。

② N児が長時間一人で遊んでいるとき

N児が親しみを持っている子どもの名前を出し、「～ちゃん～で遊んでいるよ！」と声かけをする。

- ③ N児が友達と一緒にいるが、意思の疎通ができていないとき（楽しめていないとき）
他の子どもとの仲介役をし、楽しさが共感できるようにする。その際、他の子どもたちが、N児を認めることができるように仲介していく。
- ④ 友達の声かけに応えたり、気持ちを人に向けていくには
友達の声かけに反応していなかったら、N児に「～ちゃんが～って言うてるよ。」などと言ひ、注意を向けさせる。そして、なるべく友達の方に気がいくように声かけを工夫したり、誘ってくれた子どもに手をひかせ友達との遊びに向かひていけるようにする。
- ⑤ 集団で活動するとき
学級に入れるように援助する。一旦嫌だと感じたことは消去が難しいので、楽しいものとして書き替え、お集まりの楽しさを感じられるようにする。

幼稚園という環境を活かし、N児の状態や状況に柔軟に対応し、援助が必要と感じた時に、援助をする。

Ⅲ まとめ 今後の課題

<幼稚園で育まれるものとは何か？響きあって生活していくためには、幼稚園という環境で、どのような援助をしていけば一番よいのだろうか。>

9月からN児とかかわることで、いろいろなことを考えさせられた。そして、幼稚園とは養護学校などの幼稚部や通級教室のような専門的な育ちの指導をす場ではなく、たくさんの人と自らかかわっていくことで、未知の部分の発達が促されていくような場であると、気付くことができた。幼稚園というところは、たくさんの子どもたちがいることで、人とかかわる力が育っていくと思った。しかし、N児がN児なりに響きあって生活していくために、N児のゆるやかではあるが人とかかわりの育ちの期を捉え、適切な援助をしていく必要があると思った。N児にとってのよりよい育ちを望むと、幼稚園にいるだけではその力は育まれてはいかないと思うので、その子どもの特性にあった、適切な援助をする必要があると思った。認知が難しい子どもにはその子どもにあった援助の仕方があると思うし、情緒の発達が後れている子、人とかかわる力が乏しい子にも、その子どもにあった援助の仕方があると思う。幼稚園では、より専門的な指導はできないかもしれないが、障害について研修し、できる限りその子どもにふさわしい方法や指導で、援助を心がけていく必要があると思う。そして、N児が幼稚園で響きあって生活していけるよう、N児にあった援助ができるように、努力をしていきたいと思った。